翻刻紹介

『走湯山秘決』前田育徳会尊経閣文庫蔵本

阿部　美香

前田育徳会尊経閣文庫蔵『走湯山秘決』（一巻、鎌倉時代後期写）は、金沢称名寺の僧全海が、『走湯山縁起』（五巻）および『走湯山上下諸堂目安』（一巻）とともに書写した走湯（伊豆山）権現（現在の静岡県熱海市にある伊豆山神社）の縁起である。

走湯権現を祀る走湯山（伊豆山）は、鎌倉幕府の草創を支えた聖地として、また鎌倉将軍による二所詣の地として名高い。三種の縁起は、そうした鎌倉の宗教文化を背景として、走湯山の歴史や霊験をあらわす歴史書として編纂され書写されたテクストである。

かつて走湯山の宗教的権威の拠として重んじられたであろう縁起の原本は、現在は伝えられていない。管見の及ぶかぎり、全海の書写本は中世に遡る唯一の写本である。しかも全海は、三種の縁起を同じ料紙を用いて共に巻子装に仕立て、七巻の縁起テクストとして書写している。それは、これらの縁起が本来は一具のものとして相承される性格を有するテクストであったことを示す、貴重な証といえよう。

全海は、金沢称名寺において鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて活躍したことが知られる真言僧で、『神祇秘伝（天照大神御天降和記）』や『大神宮宝基本記抄』などの神道関係の書物をはじめ、『富士縁起』『金剛山縁起』『長谷寺縁起抄』『陬陂御記文』などの諸山霊場の縁起テクストの書写を数多く行っている。[1] 走湯山の縁起もそうした活動の一環として書写され、称名寺聖教の一つとなり、江戸時代に前田綱紀の蔵書になった。

更に、金沢文庫寄託称名寺聖教のなかには、全海の師であり称名寺第二代長老を務めた釼阿（一二六一～一三三八）の手沢本として、伊豆峯の行者の縁起である『走湯権現当峯辺路本縁起集』[2]（一帖、折本、鎌倉時代後期写）が存する。全海と釼阿が書写した走湯山の縁起テクストの一群は、それぞれが鎌倉時代における走湯権現の寺社の組織や宗教体系を解明する重要な手掛かりを提供するものであり、その資料的な価値は高い。

近世に編纂された『伊豆山略縁起』によれば、江戸時代には、走湯山の縁起は五巻から成る『走湯山縁起』の巻六として『走湯山秘決』が位置付けられ、『走湯山上下諸堂目安』を伴わない「六軸」の形態で、別当般若院に伝えられていた。寛永八年（一六三一）、尾張藩祖徳川義直は、走湯山参詣の折にその「古縁起」を拝見し、自ら考訂を加えつつ書写して神庫に奉納したという。[3]「古縁起」や義直の奉納本は現在には伝えられていないが、それを祖本として写し継がれたであろう写本が、内閣文庫（和学講談所旧蔵本、編修地志備用典籍）、神宮文庫（村井古巌奉納本）、大谷大学附

属図書館に所蔵されている。それらはみな冊子本の形態をとり、『走湯山縁起』巻六として『走湯山秘決』を付す。さらに全海の書写本と比べると、『走湯山縁起』巻三の末尾に記される「寛平六年甲寅沙門慧含」に始まる一段が省かれ、『走湯山秘決』については漢字片仮名交じり文から漢字平仮名交じり文で記されるという特色を一様に示す。

以上のことから、鎌倉文化の所産である全海の書写本は、江戸期の写本とは明らかに一線を画し、中世の古態を伝える善本として注目される。しかし、いまだ翻刻されておらず、『走湯山上下諸堂目安』も『静岡県史』に部分的に抄録されるのみである。[4] 本来ならば三種の縁起テクストを一括して翻刻紹介するべきであるが、本稿ではとくに、本文の表記そのものが大きく異なる『走湯山秘決』の翻刻を行いたい。

『走湯山秘決』は、内題下に「氏人上首一人之外、不可口伝」と記されるように、氏人の奉斎する神としての走湯権現の由来を「口伝の書」として編むテクストである。そこに説かれるのは、巫女「初木」という女神を主人公とする浄土めぐりの物語である。

人皇五代の帝の御代に、巫女初木は、湯の泉から現れた月光童子に出会い問答を交わして、主神「正哉吾勝々速日天忍穂耳尊」（走湯権現のこと）の謂れを知る。やがて初木は月光童子に導かれ、日精・月精とともに走湯山の地下にある浄土に入り、俗体・女体神であり赤白二龍でもある、本地を千手観音とする走湯権現のすがたを見る。十六代の帝の御代、日金の峯に月の鏡が飛来し、松原の聖と日精・月精が、権現を奉斎した。

ここに登場する巫女「初木」とは、氏人の祖となる「日精」「月精」を養育する母なる女神で、初島に鎮座する初木神社の祭神である。初木を通して走湯山の由来が説かれる構想は、『走湯山縁起』の最も大きな特色である。漢字片仮名交じり文で記されるその物語は、末尾に物語に登場する神々の別名と本地の関係等を一つ書で示す「氏人日向記」と「氏人直木記」を添え、最後に走湯山の四至図を付している。

このような『走湯山秘決』に対し、『走湯山縁起』は、走湯権現や雷電権現の本地垂迹の縁起を漢文体で記し、全五巻から成る。そのため、二種の縁起は一見すると別個の縁起である。しかし、そのように見えながらも、実は密接な関係を有しており、一具のテクストとして成り立っている。たとえば、『走湯山縁起』が権現の世界を、仏教の側から金胎不二の曼荼羅的世界観に基づいて解釈するのに対し、『走湯山秘決』は神祇の側から日月・水火和合の神としての徳を語る。二種の縁起が異なる位相を通して共に走湯権現の世界を明らかにすることで、はじめて走湯権現の宗教世界が解きあかされるのである。[5]『走湯山縁起』を前提としながら、走湯山の「神」の由来を語る役割を担う『走湯山秘決』の特質は、例えば「念珠」「袈裟」といった明らかな仏教語を、「ツラ玉ノワ」「ウヘカクシ」などという具合に巧みに独自の和語に置き換える点に、[6] 象徴的にあらわされている。

興味深いことに、そうした『走湯山秘決』の浄土巡りの場において、巫女初木の姿はあたかも先達に導かれた行者の如く描かれている。伊豆山に参ることの意義や利生が、巫女初木の修行を通して明らかにされる趣向は、伊豆山の利生が女人の身の上にこそ強くあらわされるものである、とい

う霊地の根本的な性格を示すものであろう。そのことは、伊豆・箱根権現の前生譚を継子いじめの物語を通して語る『箱根権現縁起絵巻』において、伊豆・箱根権現が姉妹として登場することとも重なり合い、さらに真名本『曽我物語』が頼朝と夫婦の縁によって結ばれた政子を通して、伊豆山の参詣、参籠、利生の意義を語る趣向とも響き合う。(7)

その一方で、鎌倉時代の初木社の奉斎や組織、伊豆山の祭祀儀礼に臨む巫女や氏人の実態などは、よく分かっていない。『走湯山秘決』はそうした巫女や氏人の伝承する世界を含み込み、巻末に走湯山の四至図をあらわして壮大な走湯権現の祭祀世界を描く、貴重なテクストなのである。

最後に書誌を記す。『走湯山秘決』は、縦二四・〇糎、総長三八九・四糎、全十一紙からなる巻子装である。料紙は楮紙打紙。表紙はなく、本紙の端裏に外題を記す。端裏外題と内題は、ともに「走湯山秘決」と記され、端裏外題下には「全海」の書写識語がある。本文は漢字片仮名交じり文で、一部に注記（朱・墨）と連読点（朱・墨）があるほか、区切り点（朱）、声点、返点が施されている。界線は無し。第十、十一紙目に四至図を掲げ、神殿や聖跡を朱で示す。

〔注〕

（1）神奈川県立金沢文庫編『金沢文庫の中世神道資料』（平成八・八）、津田徹英解説参照。

（2）『金沢文庫の中世神道資料』に全文の翻刻紹介がある。

（3）続群書類従完成会編『群書解題』第六巻神祇部「走湯山縁起」（二八五～二九三頁、昭和三七・四）、および菊池晋介「徳川義直と『走湯山縁起』」（『神道宗教』一九八号、八五～八七頁、平成一七・四）参照。

（4）『静岡県史』資料編5中世一（平成元・三）。なお、『走湯山縁起』の本文は、『群書類従』（神祇部・巻第二五、群書類従本の底本は不明であるが、内閣文庫蔵本などと同じ江戸期の写本の系統に属するもの。屋代弘賢本を校合に用いる）、および『神道大系　神社編二一　三島・箱根・伊豆』（群書類従本を底本に神宮文庫本で再校）に収録される。巻三末尾の異同については、『群書解題』に指摘されている。また、『神道大系』には、伊豆山神社に『走湯山古文書』（二巻）として奉納された「走湯山秘決」（昭和二二年宮地直一識語を付す）が翻刻されている。

（5）鴨志田美香「走湯山縁起の表現と世界像―『走湯山縁起』『走湯山秘決』を中心に」（『説話文学研究』三四号、七九～八八頁、平成十一・五）。

（6）澤井英樹「異域の神人と神龍―走湯山縁起の世界（1）」（『神語り研究』三号、一～三四頁、平成元・十一）、同「行者・巫女・氏人―走湯山縁起の世界（2）」（『神語り研究』四号、五八～八七頁、平成六・七）。

（7）阿部美香「伊豆峯行者の系譜―走湯山の縁起と真名本『曽我物語』」（『説話文学研究』三七号、一〇〇～一一二頁、平成十四・三）。

［凡例］

一、底本の姿をできるかぎり伝えるよう、本文の大小に配慮し、改行は原文の通りとした。紙継ぎは鉤括弧で表し、紙数を付した。

二、漢字、異体字は現行の書体に改め、適宜句読点を配した。

三、本文に朱で施された注記は、〔　〕で示した。連続点は一箇所を除きすべて朱書である。

四、補入指示はそれに従い、挿入した文字の右傍に・を付して区別した。

五、巻末の四至図は、私に作成したトレース図である。

【翻刻】

走湯山秘決　　全海　　」（第一紙端裏）

走湯山秘決　〔氏人上首一人之外不可口伝〕　（内題）

人王第五帝孝照天皇御宇、巫女初木、
海底ヨリ玉ノ輿ニノリテ、アラハレイテ給ヘリ。
ミツカラ嶋ヲツクリイタシテ、屋シキトセリ。
初木嶋ト申。人語ヲ略シテ、初嶋ト云也。
此巫女、初嶋ヨリ水牛ニノリテ、月ノハシメコトニ
コノ久地良山ニスム。カ様ニスル事年ヲカサ
ネテ後、同御宇四十二年ト申ニ、久チーラ
ヤマニノホリテフモトヲミレハ、湯ノ泉ミアリ。
ハーツーキ、クタリテコレヲミルニ、キヨクスミワタ
リテ、湯ノ寒温モトモト、ノヲレリ。ユノイツミ
ノ中ニ金ノ亀アリ。背ノ上ニ月輪アリ。
径一尺ハカリ、光ヲアキラカニシテ、テリカヽ
ヤケリ。ユラニキコエアリテ、コノ月ノ
輪ノ中ヨリ、一ノ童子化現セリ。月光童子、
コレナリ。初木童子ニ問テ云ク。コノ温泉ノ
中ニ月輪アリ、何ナル神ソヤ。又光ノ中ヨリ　」（一紙）

出テ給ヘリ、何ニ人ソヤ。童子答云ク。
昔、コノ国ニノアルシニ柱ノミコト、伊弉諾、
伊弉冉ト申、一女三男ヲウミ給ヘリ。日神、
月神、ヒルコ、ソサノオノミコト、コレナリ。一女ハ
天照大神トテヲハシマス。月神ハ其ノ諱
名ヲハ、正哉吾勝々速日天忍穂耳尊ト
申ハ、是我父也。栲幡千々姫ト申ベ、我母也。
天照大神、国ノ大アルシニテワタラセ給フ。正哉
吾勝ハ国ノ政主也。湯ノイツミヲモテ家トシテ、
月ノ鏡ヲモテ心トシ給ヘリ。其ノ所以ハ、世ノ末ノ
人ノ意我執フカクシテ、水ト火トノコトシ。マサレハ
カチ、オトレハマケ、心ニシタカフ物ニハ水ノコトクシ、
サカフル物ヲハ火ノコトクニイトフ。カ様ニカタチ
カヘナル人ノ心ヲ思ヒ合シメテ、サカエススチカハス、
相叶ウル事、水ト火ノアハセタル湯ノ泉ノコトク
ナラシメントテ、湯ノ泉ヲ家トシ給也。又月ノ
鏡ヲ心トシ給事ハ、世ノ末ノ人ハ、スナヲナル事ハ
スクナク、ユカメル心ヲヽケレハ、ヨロツニツケテ暗ノコトシ。
我カ尊ト、月ノコトクシテ、人ノ心ノヤミヲテラシ
給フ。又、月ノ満チカクルハ、サカリナル物ノヽ衰ヘ、
イトケナキ物ノヒトヽナルコトハリ、メノマヘナレトモ、人
シラサルユヘニ、コレヲサトスコヽロナルヘシ。

」（二紙）

又、水ハモト月ノ精ナリ。火ハモト日ノ精也。我尊ハ
月神ニテ水ニツカサトレリ。サレトモ、日神天照ノ御
魂ヲクワヘサセ給テ、水ヲ湯トアタ、メタリ。サレハ、
二処トイフハ、コレナリ。
抑、ヨロツノ事ノ二ヨリアヒヌレハ、カナラス其中ヨリ
一ヲイタスイハレアリ。今、水火和合ノ二ノ中ヨリ、
我ハアラハレタリ。我カ形ヲカエ、名ヲコトニシテ、人ノ
ヒカメルヲイマシメ、タヽシキヲアハレミ、尊ノマツ
リコトオ、タスケタテマツル。常ニハ南山南海ニアリ。
但□、父尊ハ鸕鷀萱葺不合尊ノ世ヲ
ヲサメ給事、年ノ久シ。其御世ノ末ニ、コレヨリハ
西ニソコハクノ道ヲスキテ、胡国（天竺也）トイフ国アリ。里
アリ。聖人世ニ出テヽ、善ト政コトヲオキテ給
事アリキ。其ノ国ニ、ツキノフタオ（蓋）ヽヒノ迦羅越（長者也）
トイフモノアリ。タヘナル金（コカネ）ヲモテ、異域ノ聖人
ノ形ヲ鋳タテマツル。是ヲ我国ノ宝トセント
シテ、其ノ胡国ニワタリテ、彼ノ金人（善光寺如来也）ヲイサナ
ヒトリテ、三ノ中国（高麗、百済、新羅也）ニヤスラヒ給、世ノ末ニカナラス
我国ニウツシタテマツルヘシ。尊ト三ノ中クニヽ
オハシマス。我レコレニシテ、ヨロツノコトヲトリオコ
ナフナリ。
抑、我父ノ尊ヲ正哉吾勝々速日天忍穂耳

」（三紙）

尊ト申ハ、正哉ト云ハ、ユカメルヲステ、ヒトエニ
タ、シクスナヲナルヲ、心トシ形トシ給フユエナリ。
吾勝ト云ハ、心一スナヲニシテユカマサレハ、ヨロツニ
カツ、モノニマクル事ナケレハナリ。
勝速日ト云ハ、スナヲニシテ物ニカツ事ハ、天ノ
ソラテラシ給フ日ノ出ル時キ、日ハ一ナレトモ、クラキ
ヤミソコハカトナキモ、スミヤカニキユルニニタレハ
ナリ。天忍ト云ハ、コノミコトハ天神ニテ、アマツハラ
ノタノシミサカヘ、カキリナケレトモ、マヨエル民ヲ
アハレミテ、アラカネノウヘヲスミカトシテ、サシモ
心ニチカヒ、思ニシタカハヌ物ニマシワリテ、ヨロツヲシノ
ヒ給ヘハ、カク云也。穂耳ト云ハ、ヨコサマナル心ノ中ニモ、
ヲノツカラコトワサヲシリテ、ユカメルヲアラタメテ、
ナヲキニオモムク事ヲ耳ニ聞キ給テハ、ウレ
シクヨロコヒ給ヘハ、国ユタカニ人サカエ、穀稲
秀テサカフレハ、穂耳トハ云也。又、スエノ世ニ□
セ、コト二人、イテアラハルヘシ。椙脂膏中ヨリ、
日月ノ光ニアタ、メラレテ、一男一女ウマルヘシ。
初木コレヲハク、テヨト云々。
第十二代景行天皇御宇（三十一年）、久地良山ノ杉ノヤニヨリ、
一男一女生レタリ。一ヲハ日精ト云フ、一ヲハ月精
ト云フ、是也。月ノ上旬ヲモテ、其ノ行ク方ヲシラス」（四紙）

イセヌ。下旬ニハカヘリキタル事アリ。養母
初木ユエヲトフ。二人答テ云。我、アコヘノ国ニ、
父母コノカミアリ。カミサカヘ、ユフフサノ
アソヒアリ。ソレヘ、サヽケモノ、チクサユクラノ
ナスヘキ事アリ。コノユヘニ、阿古恵ノ国ヘ
ユクナリ。又星司カケタルワサアリ。若ッ初木
行見ト思サハ、心ニマサスヘシ。身ヲウコカサス、
心ヲアラカニセスシテ、ハツヨノスヘ、サソヒ
ユクヘシトチキリヌ。月光童子出来リ、日精、
月精ト初木ヲイナサヒテ、久地羅ノ山ノ
石屋ニ入ル。遊クホトヒサシカラスシテ、宮造
イツクシク、玉ノ柱太シキタテ、カサリ、玉ヲ
ツラネ、ユタカサハ花ノニオヒニノレリ。
好ナルカミ人、宮人、カス〳〵ツラナレリ。ミキ、
カラコリナカシロサシクサ、玉ノサラ金ノ椀ニ
ト、ノヘタリ。殿ノ内ニ高ク荘レル床アリ。
其ノ上ニ、一人スヰ給ヘリ。御年イスヽカ
アマリ、オクシヲキテ耳金ノ杖ヲツキ、
ツラ玉ノワヲモチ給ヘリ。キリクタキタル、ウヘ
カクシヲスチカケテ、スヰ給ヘリ。五人ノ神子、
コトンナルトコニスヰ給ヘリ。日精、月精、月光、
強手、軟手、ツカハシメノ神人、廿八所□。」（六紙）

又其ノ殿ニナラヒテ、ミツハ（棟三也）ノトノアリ。内ニ玉ノ
カサリノ床アリ。女体スキ給ヘリ。御年
ヨソチ（四十也）アマリ、十五柱（ハシラ）ノ御（ミ）子ツラナリスキ給
ヘリ。世ノ政コト、人ノヨキアシ、キトオシミニクミ
スヘキ法（ノリ）ヲノヘ給エリ。コヽヲ出テヽ、一ノ道ヲ
遊ク。ハルカニシテ、ヒロキワタツウミノヌナハラニ
イテタリ。
アカクシロクフタアハセノ、タカキミマシ（赤白二龍也）
ワリアヒテ、ソノタケトヒロハカリ、ナカサ
フタトサト（二十里也）ハカリナリ。其ノ身ニ千（チ）ノイロコ鱗アリ。
又千（チ）ノマナコ眼アリ。鱗（イロコ）ニシナ〳〵品々ノ絵（エ）アリ。耳鼻（ミハナ）
眼（マナコ）口ヨリ湯（ユノタキ）瀧流ル。コレヲ出テ、一ノ
道ニイテ、ユク。クホカニシテタヒラケク、ヒロ
キトコロアリ。アラカネノウヘニ、コカネノスナコ
ヲシケリ。玉ノ樹（クハ）キ玉ノ殖草（ウヘクサ）、カス〳〵イロ〳〵
ニシテ、タカラノ花（ハナ）エタ〳〵ニヒラケ、ムラ〳〵ニニオ
フ。其ノ内ニ、身ニ光アル人〳〵カス〳〵アリ。其ノ色
ミナコカネノイロナリ。其殿ノ内ニ、タカラノ
ウテナアリ。其ノ上ニ、千（チ）ノ御（ミ）手御眼（ミマナコ）アル人、
玉ノ冠ヲキテ、ヒカリテリカヽヤキテスキ給ヘリ。
タエナル御音（ミコヘ）シテ、サマ〳〵ノヨシエ事シ給フ。
聞（キク）ニ心。ユタカニ、見ルニ身ヤスラカナリ。サテ、

」（七紙）

月光童子ヲ前トシテユケハ、久地羅山ノ
岩屋（イワヤ）ニイテヌ。
十六代ノミカトノトキ、コマノカラサキ、イソヘノ
ハマヨリ、月ノカヽミ、日カネノ峯ヘウツリ給テ
ノチ、松原（マツハラ）ノヒシリト、日精、月精ノウチ人ト
トモニ、権現ヲカシツキタテマツル。コレハ、氏人ノ
中ニ上首一人ハカリ、面受口伝シテ、筆ノ
アトニト、メサルナラヒ事也。ユメ〳〵披露スヘ
カラス。

一、走湯権現ハ、伊弉諾伊弉冉尊皇子、一女三男
之随一也。
正哉吾勝々速日天忍穂耳尊、是也。（本地千手観音）
月光童子者、正哉吾勝皇子、天津彦々
火瓊々杵尊乃弟也。御母栲幡千々姫也。
一、月光童子雷光童子也。（本地如意輪観音　今号御霊）以八大童子為（本地八大観音也）
眷属。
一、栲幡者、女体遍照権現、是也。（本地阿弥陀如来）
一、日精者、（本名）岩―童―子也。ハ（今号岩童子）（本地弥勒）
一、月精者、（本名）湯―護―法也。ハ（号護湯童子）（本地馬頭観音）
一、軟（ヨハ）手者、（本名）桜―童―子也。ハ（今号桜童子）（本地聖観音）
一、強（ツヨ）手者、（本名）拳―童―子也。ハ（辛夷童子也）（本地不動明王也）

」（八紙）

一、初木者、正哉吾勝御乳母津木花香、是也。
一、月光童子持金筐。（宋地聖観音、赤沢権現是也）々中入如意宝珠与
利剣ヲ。宝珠ハ女体ノ財、利剣ハ男体之
財也。此二ノ神宝ハ二（リノ）従神ト顕ヒ玉也。

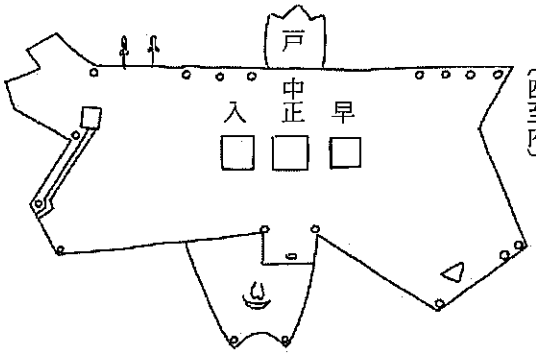
氏人日向記

」（九紙）

一、権現ニ有二人従神。一云手入（テルクマ）玉、一云早破（ハヤキリ）擬。
御在所、社内有四神・遍照権現・走湯権現・
手入玉明神・早破擬明神、是也。

氏人直木記

（四至内）



」（十紙）

」（十一紙）

［翻字注］

＊1 「所以（ユエ）」連続点は墨書。
＊2 「人」声点あり。平濁。

［付記］

本書の紹介・翻刻を御許可下さいました前田育徳会尊経閣文庫に、
篤く御礼申し上げます。

（あべ　みか　歴史文化学科非常勤講師）